きずな

文化財保護センターだより

第５号　　平成４年11月１日

財団法人　岐阜県文化財保護センター

〒501-02　岐阜県本巣郡穂積町牛牧宮下395　　TEL(FAX)05832-7-8980

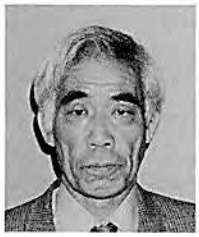
●もくじ

元三ヶ根１号墳……1
センターに期待する……2
発掘状況……3
トピックス……4
発掘を終えて……6
タイムスリップ 探検隊……7
センターだより
整理作業に参加して(その４)……8

元三ヶ根１号墳

多治見市明和町で調査された、６世紀に造られた古墳時代後期の古墳です。石室の上半分は壊れていましたが、銀環・須恵器等が出土しました。今回調査した元三ケ根１号墳は、市内でも最も古い古墳の一つと確認されました。大原川左岸の小山の頂上部にあるこの古墳からは、南東方向に市街地が一望できます。埋葬された人物は、この山から見渡せる広大な地域を支配していた有力者であったと考えられます。

センターに期待する



三重大学教授

八　賀　　晋

（財）岐阜県文化財保護センターが発足して2年目を迎えられた。当初、センターの機能として盛り込まれた大きな構想とは若干変更があったが、年度計画に基づいて調査をされる皆さんの努力に敬意をはらうものである。

センターは、さし迫った公共事業に伴う発掘調査の仕事が主体になることは勿論であり、その調査の成果の公表はもとより、これまでの県内の埋蔵文化財等の資料の整理・保管・管理など、学術的な総合センターでもあることが期待されている。こうした意味でも、センターは、埋蔵文化財に対する基本的な姿勢や体制の整備が急がれる処であろうと思う。私なりに思う処を述べてみたい。

(1)　調査員の確保

現在、センターで活躍される調査員の方々は、かつて考古学等を専攻され教育現場に従事されていた教職員が中心と聞く。勿論教育行政のなかでの配慮が加わっていることは承知のことであるが、こうした人材の登用には近い将来限界が生じはしないであろうか。センターの中核となる熟達した調査員の定着が必要であろう。さらに、調査員の高い学識・技術水準の維持が必要であろう。奈文研等で実施されている研修課程への予算措置をもった積極的参加が望まれるし、内部での統一的調査理念と方法論が確立されるべきである。

(2)　県内各地域との情報交換

センターは各市町村の文化財調査員の学術・技術・情報収集の中心となるべきである。現在、県内市町村には埋蔵文化財担当者が30人余おられる。これらの方々との積極的な交流は、多くの面で有意義さをもつ。その指導的役割をセンターが持つべきである。

(3)　調査組織と役割

センターは発足当初であり、現在の小規模な調査体制ですべての責務を全うすることは困難である。課題はいくつかあろう。

徳山ダム・中部縦貫道等、当面する公共事業に伴う各種の予定された遺跡の調査以外に、突発の調査の必要性にどこまで対処できるであろうか。地元市町村と協議する前でも、やはりこの事態に臨戦的に対処し得る的確な組織づくりが必要である。これは単に現場調査のみでなく、市町村の要請に応えた、例えば写真撮影、現場実測、保存方法の検討など、実務的な応援体制の充実が要求される。こうしたセンターに対する要望は、県全体の文化財の保護に直接的に寄与するものでもある。この意味でも、センターに保存科学などの諸設備を含めるような、充分な予算措置がとられることを願うものである。

(4)　文化財行政とセンター

全国各県では文化財行政と文化財センターの役割は明確であり、これによって円滑に責務が遂行されている。ただ、両者の疎通を欠いてはならない。行政的に文化財が処理されるのではなく、両者の検討によって進められるべきである。センターの発言権があってしかるべきであろう。

センターの果たすべき役割が大きい。ご発展を祈ってやまない。

発　掘　状　況

■元三ヶ根１号墳発掘調査

この古墳は多治見市内にある多治見西高等学校の裏山の頂上に立地する、直径10mの古墳時代後期（６・７世紀）の円墳で、国道248号のバイパス工事にともなって発掘調査を実施することになりました。

古墳時代後期には、多数の古墳が狭い範囲に集中するいわゆる群集墳が多く、この古墳も元三ヶ根古墳群の一部をなしています。しかしこの１号墳は、他の古墳とはやや離れた山の頂上に位置し、独立しているようです。

古墳の内部には、全長６mの規模をもつ横穴式石室がありました。横穴式石室は、埋葬者を葬る玄室とその入口部の羨道とに分かれますが、ここの玄室は横幅が真ん中部分で最大の広さ（２m）となり、石室の開口部に向かってしだいに狭くなっていきます。これは洞張りといわれる様式で、美濃地方に特有のものです。また、羨道の短いのもこの古墳の特徴となっています。

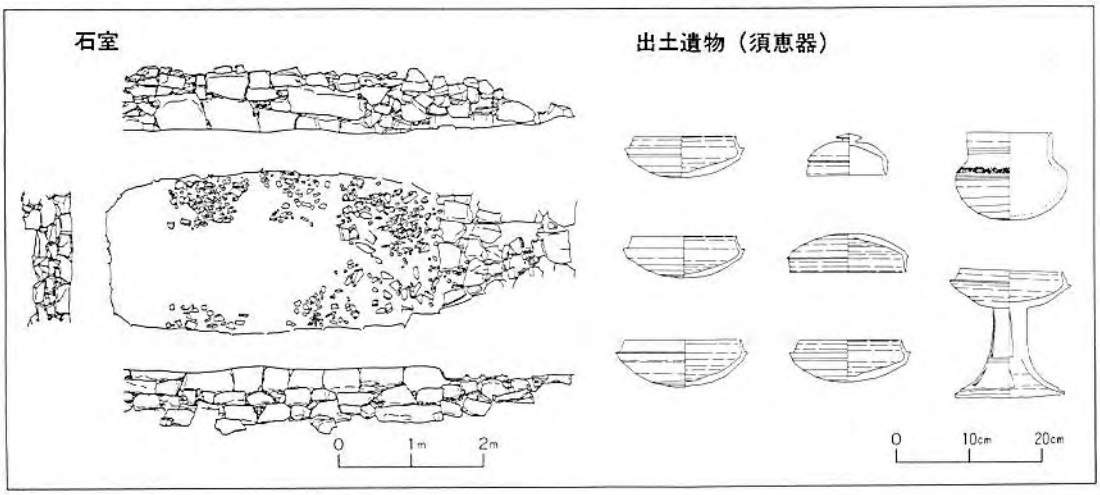
石室内の床には小さな石が敷き詰めてあり、羨道の床より一段低くしてあります。この形態は、県内の木曽川流域や愛知県の西三河地方でみられます。

床面付近からは、装身具の銀環２点で、鉄鏃などの鉄製品と須恵器・土師器など土器類が出土しています。もっとも多かったのは須恵器で、杯・壺・高杯・蓋付き高杯などです。人骨の確認はできませんでした。

これら須恵器の多くは、６世紀前半より中頃の製作と推定され、この古墳の築造もこの時代と考えられます。しかし出土遺物の中には７世紀の須恵器も含まれることから、この古墳で、異なった時代に複数の埋葬が行われた可能性もあります。また、同じ石室内から鎌倉時代の土器も出土しました。これは何を意味するのでしょうか。鎌倉時代に盗掘されたのでしょうか。

多治見地区では虎渓山１号墳（古墳時代後期）が知られ、これより早い時期の古墳は確認されていません。元三ヶ根１号墳も、この地域で初めて古墳を築造していく時期の、地元の有力者のものと考えられます。

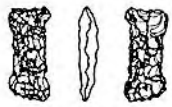
当センターでは、今回の１号墳の調査に続き、元三ヶ根３～６号墳の調査を本年度中に完了する予定をたてています。今回の調査が、東濃地方における古墳時代解明の手がかりになればと考えています。



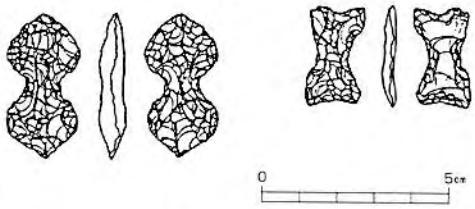
トピックス

■黒曜石の異形石器（藤橋村上原遺跡）

図A　上原遺跡出土の異形石器



図B　小の原遺跡出土の異形石器



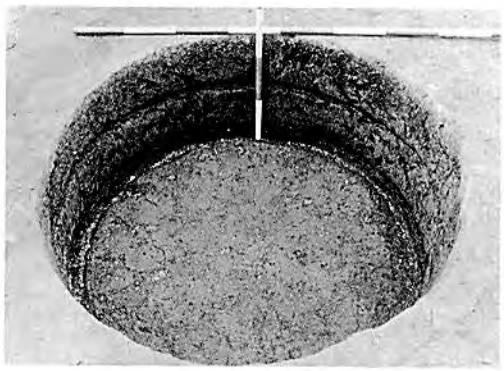
縄文時代の遺跡から出土する石器のなかに異形石器と総称されるものがあります。その多くは、どのように使用されたか分かっていません。

今年の調査で出土したものは、胴の中央部分にくびれを持ち、蝶ネクタイや糸巻きのような形をした異形石器です。図Aはこのうちの一つで、岐阜県では産出しない黒曜石で作られています。他に同形のものが3点出土していますが、石材は東海地方で石器として多く利用されているチャート製（赤色）のものです。これらはいずれも石材の剝片を用い、周辺部分の鋭い縁はつぶしてあります。特にくびれ部分はたんねんに加工され、全体にていねいに作ってあります。異形石器は、いずれも上原遺跡で確認した穴の中から見つかり、このうちの黒曜石製の異形石器は、縄文時代前期後半（約7,000年前）の、北白川下層式とされる関西地方に多い土器片と共に出土しています。

この形の異形石器は、いままでに京都市の北白川遺跡で確認され、県内では村山遺跡（国府町）・味屋遺跡（小坂町）などの飛騨地方と、落合五郎遺跡・久須田遺跡（中津川市）・芦戸遺跡（坂祝町）など各地で出土しています。近県では、縄文時代前期の代表的遺跡である、福井県の鳥浜貝塚で4点出土しています。

揖斐川最上流部の徳山地区では、小の原遺跡（平成3年度報告書発刊）でチャート製12点の報告がされています。（図B）　これらの異形石器は、いずれも縄文時代前期の遺跡から出土しています。この種の異形石器は両端が尖ったものとくぼんだものの2種に分けられますが、徳山地区では両方みられます。

■近世の厠跡（藤橋村上開田村平遺跡）



厠跡出土状態

上開田村平遺跡は、縄文時代中期～後期の集落跡として調査中ですが、昭和62年1月に徳山村が廃村になるまでの、上開田地区の成り立ちや人々のくらしを探る重要な遺構・遺物も検出しています。その一つに厠があります。厠とは今のトイレのことです。

同遺跡で地表から40cmほど下に、赤土がリング状にみられる遺構が5ヵ所で確認されました。リングの中の土を慎重に取りのぞくと、

円筒形に堀りあがり、赤土の壁には桶の板目跡と２本の「タガ」の跡がはっきりとあらわれました。そのうちの一つの大きさは、検出面で桶の直径約135cm、深さ52cmで他もほぼ同じサイズです。遺構には桶そのものは残っていませんが、穴を堀り底に赤土を貼り、桶を納めたのち周囲に赤土を貼り付けてしみ出しを防ぎ、最後に穴との間に土を入れて作っていった設置の過程がわかります。

最近出版された浅野弘光氏（ぎふ常民文化主宰）の『厠考』によれば、この形態の厠は「樽センチ」と呼ばれるもので、昭和30～40年代まで県下全域で利用されていたもののようです。

今回確認された厠跡は、同地区の路地の下部にあたります。明治以後この場所に建物があったことは確認されていません。このことから、同地区にあった江戸時代以前の屋敷内にあった厠であったことも考えられます。それも、村外より桶職人を呼ぶことができる財力のあった家のもののようです。

■Ｓ字甕　（美濃加茂市尾崎遺跡）

弥生時代に作られた多様な土器の中に、甕（卵型の胴部と広い口を持つ器）型のものがあります。東海地方では、この甕型の土器は弥生時代の中ごろ（約2,000年前）になり、土器の底の部分に変化が現われ、台が付いてきます。

この変化は、この種の土器が煮沸用として定着し発展していったと考えられます。このような甕型土器の変化の中で、弥生時代末より古墳時代初期にかけて、台付きのＳ字状口縁甕型土器（以下Ｓ字甕）とよばれる独特の形の土器が、濃尾平野で現われます。この土器は、その後関東地方や近畿地方へ伝わっていきます。

Ｓ字甕は、古式土師器と呼ばれる種類に属します。この甕型土器の特徴は、①口縁部の先端が「Ｓ」の字に似た形に仕上げてある。②極めて薄手に仕上げてある。③整形の段階で粗いハケメの調整がされている。などをあげることができます。

現在調査をすすめている尾崎遺跡では、弥生時代中期・後期、古墳時代に属する住居跡を発掘調査していますが、このＳ字甕を単独で出土する住居跡が数軒検出されました。

県内でこのＳ字甕が多量に出土している遺跡として、宮の脇遺跡（可児市）・八龍遺跡Ａ地点（各務原市）など数遺跡に限られています。

Ｓ字甕が製作された３世紀末より４世紀の時期は、小国家が分立していた弥生時代から、全国統一への動きが展開される古墳時代への過度期にあたります。この時期は、全国的な規模で土器が交流していく時代でもあります。最近の調査報告によれば、濃尾平野で生まれたＳ字甕は、関東地方・遠くは宮城県でも確認されています。今回の尾崎遺跡の出土により、Ｓ字甕出現の経過を探る手がかりが、明らかになることが期待されます。

Ｓ字甕の出土状況

発掘を終えて

■藤原遺跡発掘調査概要

所　在　地　大野郡久々野町長淀（ながとろ）
発掘調査期間　平成４年５月11日
～平成４年８月11日
調査面積　1,000㎡
遺跡の立地　飛騨川左岸の段丘
時　　代　縄文時代

1　はじめに

藤原遺跡は、一般国道41号局部改良工事にともなう長淀１号橋の建設の際に発見された遺跡です。縄文土器や石器が採集されており縄文遺跡と推定されていましたが、遺構の有無、詳しい時期などは不明でした。

調査は、まず遺跡の広がりを確認するために、８ヵ所にトレンチ（試掘溝）を入れました。その結果第２トレンチ以北は、遺構・遺物のある可能性がきわめて低いと推定されました。そこで第２トレンチ以南を調査することにしました。

2　遺構の状況

調査地点の北端は、遺物包含層が薄く、自然地形の傾斜は観察されましたが、遺構は検出されませんでした。南東部でも石の流れ込みが激しく、遺構は検出されませんでした。南西部からは溝状遺構・ピット（穴）群・土壙（こう）・配石（はいせき）遺構が検出されました。溝状遺構は２ヵ所で検出されました。いずれも屈曲しながら調査地点の西方へ延びており、時期・性格とも不明です。ピットは直径約30cm～１ｍの大きさで、主に縄文時代後期中ごろ（約3,500年前）のものと推定されます。配石遺構は、長さ約３ｍ最大幅約80cmの範囲に、火を受けたり割れたりした石が広がっています。時期・性格は不明です。

3　出土遺物について

詳しいことは今後の整理作業を待たねばなりませんが、主な出土遺物は縄文時代の土器と石器類でした。土器は、縄文時代早期の約8,000年前から後期のものまで各時代のものがありますが、早期・後期のものが注目されます。これらのうち早期のものは、押型文（おしかたもん）（山形文・楕円文）土器や、条痕文（じょうこんもん）系の茅山（かやま）下層式土器（写真参照）が確認されています。

また後期のものとしては、加曽利（かそり）Ｂ式土器が確認されています。茅山下層式・加曽利Ｂ式土器は、いずれも関東地方全域で多く確認される土器で、この地方にもその影響が認められることをしめしています。これらの資料は飛騨地方の縄文土器研究にとって貴重な資料になるものです。

石器には、石鏃（せきぞく）、スクレイパー（掻器（そうき））、石錘（せきすい）、打製石斧（だせいせきふ）などが見つかっています。またフレイク（剥片）類は、飛騨地方に多く見られるいわゆる下呂石のものが比較的多く、信州方面より移入したと考えられている黒曜石のものも12点あり、この地方での文化の交流が盛んであったことを想定させます。

タイムスリップ探検隊

■夏休みの始まった直後の７月29・30日の両日、小学校５・６年生とその保護者のみなさんを対象として、藤橋村徳山の上原遺跡で、縄文時代の遺跡発掘と整理作業を体験する行事をもちました。ふだん年配の作業員さんたちが発掘を行っている山あいの静かな現場で、52名の探検隊員が汗びっしょりで、土器・石器を掘り出しました。その夜は「ふじはし星の家」に宿泊し、天体望遠鏡を使った星雲の観測・花火大会、翌日には土器洗いに拓本とりと、暑さのなか終始元気で熱心な取り組みが展開されました。

探検隊に参加した子の感想文を紹介します。

▲穂積町立牛牧小学校　6年生

ぼくの参加のきっかけは、お母さんが担任の先生から手紙をもらってきたことでした。その手紙には、タイムスリップ探検隊で上原遺跡の土器を発掘することが書いてありました。歴史が好きだったぼくはさっそくお母さんに言って応募しました。

ぼくは、昔の土器を自分で発掘することができるので、とてもうれしく思いました。

発掘を始めると、なかなか土器は出てきませんでした。出てこないときはいらいらしてやめようかと思ったけど、一つ出るとはげみになり、とても楽しくなってきました。

掘りだした土器の中には縄目もようがしっかりしているものもありました。掘っていくうちに土器と石器の見分け方もおぼえることができました。

来年は中学１年になるけど、弟を来させてぼくもついてきて、楽しい発掘をもう一度やりたいです。

▲各務原市立緑苑小学校　5年生

私はタイムスリップに参加するとき、土器が一つでも掘れるかなあ、と思っていました。掘り始めて最初のうちは掘っても掘っても出てこなかったので、少しいやになってしまった。続けて掘っているうちに、やっと一つ見つけました。するとやるぞという気持ちになり、だんだん楽しくなってきました。そして最後までにもう一つは見つけるぞと心の中できめました。

続けて掘っているうちに、また一つ、土器みたいなものが出てきました。作業員のおばさんに聞いてみると「これは土器だよ。」といわれました。

また、土器を洗う時に、まだなれていないので、洋服やくつがよごれたりしたけど、きれいなもようが出てきたときは、とてもうれしかった。拓本をやるときも、すみをつけすぎたり、紙がやぶれたりしたけど、最後には手つきがうまくなったと先生にほめらたのでうれしかったです。

タイムスリップ探検隊に参加できて、とてもよかったなぁと思いました。

センターだより

●整理作業に参加して　（その４）

前回は「作業についての感想」でしたが、今回は「意見や希望」などを聞きました。

「縄文時代の生活を想像し、人間の知恵の素晴らしさを感じます。後世に残すために保存・展示などの施設が沢山できればよいと思っています。」

「これでいいのかと不安になることがあります。いつも先生方に指導していただけたらもっと能率もよくなると思います。」

「水洗い作業は長時間同じ姿勢を続けるため、疲れるので座り易い椅子にして欲しいと思います。」

「一つの作業を長く続けるのではなく、一定の流れの中で、どの作業でもこなすことができたら幸いです。」

出土遺品の整理作業の主役であるご婦人方の話を４回に分けて載せましたが、みなさんがこの仕事に興味と誇りを持ち、家族の理解と協力のもとに充実した気持ちで参加しておられることがよくわかりました。また発掘現場見学や講習会などで一層勉強したいと前向きに取り組んでおられることも知ることができました。早速椅子の購入や現場見学を行いましたが、今後一層職場環境の改善なども進めてまいります。

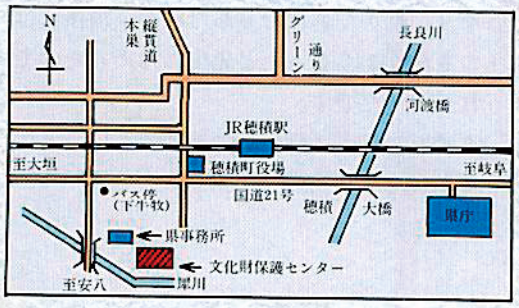
次号からは発掘作業の主役の方々のご意見などを載せることにします。

整理作業風景

●日誌

7．3	美濃加茂市教育長、尾崎遺跡視察
13	多治見市(元三ヶ根古墳)発掘調査始め式開催
13	美濃加茂市長・文化財審議会委員10名、尾崎遺跡視察
23	建設省岐阜国道工事事務所８名、尾崎遺跡視察
28	久瀬村小中学校(32名)上原遺跡にて発掘体験
29～30	第一回「タイムスリップ探検」を徳山上原遺跡・ふじはし星の家にて開催(52名)
31	ボーイスカウト本巣１団(30名)上原遺跡にて発掘体験
8．4	多治見西高校(５名)元三ヶ根古墳にて発掘体験
7	美濃加茂市「親子ふるさと巡り」30名、尾崎遺跡見学
11	小坂町(藤原遺跡)発掘調査始め式開催
18	東濃教育事務所社会教育課長他12名、元三ヶ根古墳視察
19	多治見市教育委員会７名、元三ヶ根古墳視察
20	大垣文化財愛護少年団(27名)上原遺跡にて発掘体験
21	岐阜教育事務所管内市町村教育長会(25名)来所
26	名古屋女子短大講師斉藤氏、元三ヶ根古墳視察
26	八幡町(勝更遺跡)発掘調査開始
27	国府町(深沼遺跡)発掘調査始め式開催
9．3	可児市教育委員会、元三ヶ根古墳視察
9	多治見市文化財審議委員佐藤氏、元三ヶ根古墳視察
11	日本道路公団名古屋建設局、勝更遺跡視察
18	多治見西高校40名、元三ヶ根古墳見学
24	高山考古学研究会４名、深沼遺跡視察
28	国府史学会３名、深沼遺跡視察
30	国府町助役木戸脇氏、深沼遺跡視察
10．1	藤橋村徳山(山手宮前遺跡)発掘調査開始
6	八幡町教育委員会４名、勝更遺跡視察
7	八幡町文化財審議委員佐藤氏、勝更遺跡視察
13	東海北陸道事務所2名・美濃工事事務所3名、勝更遺跡視察
17	深沼遺跡現地説明会(108名)開催
18	元三ヶ根１号古墳現地説明会(77名)開催
19	白鳥町(中筬遺跡)発掘調査始め
21	文化庁文化財調査官松村氏、深沼遺跡視察

■編集後記

ご多忙中のなか原稿をお寄せいただきました八賀先生には心から感謝申し上げます。今年の夏もギラギラ天気の酷暑が続きました。８月になっても残暑が厳しく、作業員の方々お疲れさまでした。ようやく秋風が心地良く感じられると思っているうちに、もう肌寒さを覚える頃になりました。それもそのはず立冬はもうすぐです。

人類最古の栽培植物とも言われている瓢箪を、この夏センターの窓辺で栽培しました。様々な型の30箇余りが収穫できました。関係の方々の無病息災を祈りつつ六瓢の製品化を考えています。